様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22　年　5　月　20　日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2008　～　2010
課題番号：20830137
研究課題名（和文）　乳児の「心」に対する母親の認知および行動の実態と乳児期の心の理解発達への影響
研究課題名（英文）　Maternal tendency to focus on infant’s mind: Relation among maternal perception ,behavior and infant’s mind understanding

研究代表者
篠原　郁子　（　SHINOHARA IKUKO　）
白梅学園短期大学・保育科・講師
研究者番号：30512446

研究成果の概要（和文）：本研究は、乳児の母親を対象に「乳児の心に目を向ける傾向」を多角的に測定し、乳児の内的状態に対する目の向けやすさという認知的特徴と、乳児の内的状態に調和した関わり方という行動特徴の関連を検討した。乳児の心の状態を読み取りやすいという母親の認知的特徴は、母子自由遊び場面において、子どもと一緒にやりとりを作り上げていく養育行動と関連することが見出された。

研究成果の概要（英文）：This study investigated on maternal tendency to focus on infant’s mind . The relation among mother’s tendency to attribute some mental states to infant and her behavior toward her infant was investigated. It was found that mother who tended to think about infant’s mind structured mother-infant play appropriately by taking care to follow the infant’s inner states.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,370,000	411,000	1,781,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,570,000	771,000	3,341,000

研究分野：発達心理学
科研費の分科・細目：社会科学・教育心理学
キーワード：乳児期・母子関係・mind-mindedness・emotional availability・縦断研究

１．研究開始当初の背景

心の理解の発達について、特に心の理論(他者の行動を欲求や信念等に基づき説明する能力)に関する研究は多く蓄積されてきた。心の理論獲得の典型的なタイムテーブルの解明に加え、獲得時期の個人差や文化差へと研究は拡大し、中でも個人差の規定因の探求が精力的に進められている(Repachili&Slaughter,2003)。そして、親子やきょうだい間の心に関する会話 (Dunn,Brown,&Beardsall,1991;Pernaer,Ruffman,&Leekam,1994)や、親子間のアタッチメントの安定性がより早い心の理論獲得と関連することが見出されてきた(Fonagy,Redfern,&Charman,1997;Meins,Fernyhough,Russell,&Clark-Carter,1998,Fonagy,Steele,Steele,&Holder,1998)。特に、生後

早期から構築され継続する親子関係の特質であるアタッチメントが、その 3〜4 年後の心の理解の発達に与える長期的な影響力には大きな関心が寄せられてきたと言える。ところが近年、アタッチメントの質自体よりもむしろ、養育者の個人的特徴を重視する議論が盛んになっている(Fonagy,Gergely,&Target, 2007;Symons,2004)。その養育者の「特徴」として、例えば Meins(1997)は、母親が乳児を豊かな心的世界を有した存在であるとみなす傾向に着目し、これを mind-mindedness (以下 MM と略記)と呼んでいる。また Oppennheim &Koren-Karie(2002)は、母親が子どもの行動の背景にある動機について考える傾向として「洞察性(insightfulness)」の概念を提唱した。そして生後 1 年目に測定された MM や洞察性が、後の心の理論獲得を予測することが実証されたことから (Meins,Fernyhough, Wainwright,DasGupta,Fradley,&Tuckey,2002;Oppenheim,Koren-Karie,Etzion-Carasso,&Sagi-Schwartz,2005)、養育者が乳児の心に目を向けることの重要性が注目されているのである。

それでは、養育者のこうした特徴は何故、子どもの心の理解の発達を引き上げ得るのだろうか。そのメカニズムについて Fonagy ら(2007)や Meins(1997)は、乳児の内的経験について思考しやすい母親は、乳児の表情や言動から心的状態を読み取りやすく、実際の母子相互作用の中で心的語彙を豊富に付与し、乳児なりの視点(世界への表象)を想定したやりとりを交わすことによって、子どもが心を理解する足場を提供しているのだろうと仮定している。しかしこうした説明の全体的な検証は未だ実施されていない。というのも、これらの説明には養育者による乳児の心の読みとりや解釈といった「認知」と乳児の心に焦点化した「養育行動」という二つの側面が含まれているが、先行研究はこの点を明確に区別し、同一研究内でその双方を扱い得ていないためである。

そこで筆者はこれまで、母親の認知的特徴として Meins(1997)の MM 概念の定義に着目し、乳児の言動に対する心的帰属の行いやすさを測定する実験方法を案出してきた (篠原,2006)。そして測定された母親の認知的特徴の個人差と実際の子どもへの行動との関連、および、子どもの心的理解発達への影響を問う一連の縦断研究を行ってきた。その結果子どもが 6 ヵ月時に測定された母親の MM の高さが、生後 6、9、18 ヵ月時の母子相互作用場面での、母親による子どもへの心的語彙の豊富な使用量と関連することを見出している(Shinohara,2008)。つまり、母親の認知的特徴が子どもの心的理解を促進すると目されている心的語彙の付与行動と実際に連関していることが認められたのだが、実はその後の追跡調査から、篠原(2006)で測定された母親の MM の高さは、幼児期の心の理論獲得と関連する訳ではないことが示された。仮説とは異なる結果について、篠原(2006)による一連の研究では、MM として母親による乳児への心的帰属の量的豊富さを、現実の行動としても心的語彙の付与量のみを扱い、乳児の心的世界の読みとりや、実際の行動の「適切さ」問うていないことが、課題であると考えられた。

２．研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では、乳児の心に目を向ける傾向と呼ばれるものについて、母親の中で量的な特徴と質的な適切さがどのような関連を持つのかを検討することを目的とした。特に、乳児の心に目を向けやすい、という母親の認知的スタンスの傾向の強さが、実際の養育行動として乳児の状態に照らして適切なかかわり方とどのように関連しているのかを問うこととする。特に、母親の養育行動について、乳児の状態に沿った適切なかかわりは、乳児の側の心の理解の発達に影響を持ちうると考えられており、本研究ではそうした養育行動として、母親の情緒的利用可能性（Emotional Availability）に着目したい。以下、本研究の目的を具体的に示す。

(1) 乳児の心に目を向ける認知的特徴の測定と個人差の検討：

母親の認知的特徴を詳細に検討すべく、生後 6 ヵ月児の母親を対象に量的豊富さを測定する。篠原(2006)の MM 測定実験を実施し、乳児刺激に対して、母親が心的世界の存在を帰属する量について特徴を捉える。

(2) 乳児の心に目を向ける認知的特徴と行動的特徴との関連：

母子自由遊び場面を観察し、非言語的関わりも含め行動全体を分析対象とし、母親が乳児の心の状態に敏感で、子どもと調和した適切な関わりを行うかを「情緒的利用可能性(Emotional Availability:以下 EA)」(Biringen, Robinson,& Emde,1998)の評定により把握する。母親の行動上の個人差に、(1)の認知的特徴が実際に影響しているのかを明らかにする。さらに、母親の認知的特徴の養育行動への反映について、同時期連関に留まらず、異なる時点への継続的な影響が存在する可能性を想定し、生後 6 ヵ月時と 12 ヵ月時の 2 回、母親による子どもへの行動を観察して検討を行う。

３．研究の方法

(1) 第一次調査

①研究参加者

6 ヵ月児とその母親 20 組を対象に研究を実施した。母親の平均年齢は 34.00 歳(SD : 4.03)であった。乳児の平均月齢は 6.80 ヵ月(SD：.83)であり、男児・女児各 10 名であっ

た。第 1 子が 9 名、第 2 子以降が 10 名、不明が 1 名であった。
②手続き
　大学のプレイルームに母子を招き、一組ずつ、以下の実験と観察を実施した。
③母親のMM測定（認知的特徴の豊富さ）
　母親の、乳児への全般的な心的帰属のしやすさ（量的豊富さ）を測定した。乳児という存在に対して、どれほど豊富に心の存在を想定するかという量的な豊富さを測定するため、篠原(2006)が開発したMM測定実験を実施した。
　母親に乳児のビデオ映像を呈示し、乳児が何らかの心的状態（感情・欲求・思考など）を有していると思うかを質問した。具体的な内容を口頭で自由に回答するよう求めたが、回答回数は自由であり、また、乳児が特に心的状態を有していないと思われる場合にはその旨回答するよう教示を行った。ビデオ映像に登場する乳児は母親自身の子どもではなく、全ての協力者に共通の乳児刺激を呈示した。5 つの刺激に対する回答の合計数を算出しMM得点とした。
④母親の EA の評定　（行動の適切さ）
　プレイルーム内にある玩具を用いた母子の自由遊び場面を観察した。録画された 10 分間を分析対象とし、Emotional Availability Scale　(Biringen,Robinson & Emde ,2000)に基づき母親の行動の適切さを評定した。EA の下位項目 4 つの内容と各項目の得点幅は以下の通りであった。「敏感性」： 子どもの信号に気付き敏感に応じる。子どもの情動に応じるとともに、母親自身も情動を表出する(1－9 点)。 「構造化」： やりとりに枠組みを付与する。子どもと一緒に遊ぶ相手として情報を与え、わかりやすく導きながらやりとりを支える(1－5 点)。 「非侵入性」： 子どもを圧倒せず、過干渉や過保護でない(1－5 点)。「敵意の無さ」: 敵意や冷たさをむけない(1－5 点)。各下位項目の評点を得点とし、以下の分析に用いた。

(2) 第二次調査
　第一次調査に参加した母子を追跡調査し、子どもが１２ヵ月になった時点で再び調査を実施した。
①　調査参加者
　調査対象となったのは 18 組の母子であった。乳児の平均月齢は 14.42 ヵ月(SD：1.92)であり、男児 8 名、女児 10 名であった。第 1 子が 9 名、第 2 子以降が 9 名であった。
②母親の EA の評定　（行動の適切さ）
　先に測定された母親の認知的特徴（MM得点）が生後 12 ヵ月時の子どもに対する母親の具体的行動にも影響しているのかを検討するため、再度、プレイルームに母子を招き、自由遊び場面の観察を行った。プレイルーム内にある玩具などを使った遊び場面を録画し、10 分間の録画ビデオに基づき母親の EA を評定した。評定項目と方法は 6 ヵ月時と同様であった。

４．研究成果
(1) 母親の MM について
　5 つの乳児ビデオ刺激を呈示し、それらに対して、母親が乳児の内的状態に言及した回数をカウントした。その結果、回答数の平均は 11.50 回(SD:4.06)であった。つまり、母親は 1 つのビデオに対して平均 2 回以上の、乳児の心の状態に言及していた。これより、母親らは乳児に対して、何らかの内的状態を読み込みやすいという特徴を持っていることが示唆された。しかし、回答数のレンジについて 5-19 までとばらつきがみられた。これより、母親の間でも、乳児にどれほど心の存在を仮定するかという量的な特徴には個人差があることが示唆された。
(2) EA について
①生後 6 ヵ月時の検討結果
　母子自由遊び場面における、乳児に対する母親の行動を、ＥＡスケールに基づき評定した。ＥＡの各下位項目について、敏感性の平均は 5.60(SD:1.93)、構造化は平均 3.05 点(SD:1.28)、非侵入性は平均 3.85(SD:1.31)、敵意の無さについて平均 4.80(SD : .41)であった。母親が実際に乳児とやりとりをする際に見せる行動上の特徴に、乳児の心に対する焦点化のしやすさが関連しているのかを検討するため、MM 得点と EA の 4 つの下位得点について相関分析を実施した。しかし、有意な相関関係は認められなかった。そこで、より詳細な分析を行うべく MM 得点を高群(n=7)、中群(n=7)、低群(n=6)に分類し、EA の各下位得点について MM の 3 群と乳児の性別による 2 要因の分散分析を行った。その結果、EA の構造化の評点について、MM 得点による有意な主効果が認められた(F (2,14) =3.98,p=0.43)。構造化得点は MM の中群、高群、低群の順に高く、下位検定(*HSD* 法)の結果から MM の中群は低群よりも有意に得点が高いことが見いだされた(Figure1)。

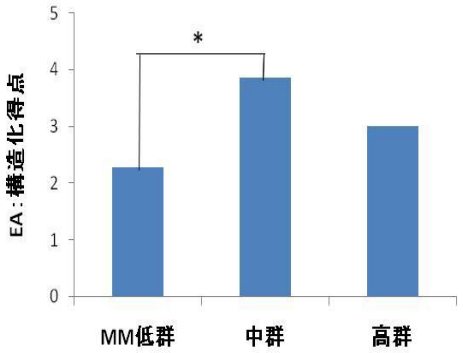

Figure1　MM の高中低群における EA の構造化得点

② 生後 12 ヵ月時の検討結果

2 度目の母子自由遊び場面の観察に基づき、乳児に対する母親の行動の適切さを、ＥＡスケールにより評定した。ＥＡの各下位項目について、敏感性の平均は 6.83(SD:1.86)、構造化は平均 3.42 点(SD:1.08)、非侵入性は平均 3.72(SD:1.07)、敵意の無さについて平均 4.05(SD：.38)であった。

子どもが 6 ヵ月時に測定された、母親が持つ乳児に対する心の読み取りやすさが、これらのＥＡ得点と関連しているのかを問うため、相関分析を実施した。しかし、6 ヵ月時の分析結果と同様に、有意な関連は認められなかった。そこで次に、6 ヵ月時と同じく、MMとＥＡの曲線的関連の可能性についても検討するため、母親をMM得点により 3 群（高・中・低）に分類し、分散分析によりＥＡ得点のとの関連を探った。しかしながら、MMとＥＡには有意な関連は認められなかった。

(3) 考察

本研究では、母親が示す乳児の心の存在に対する目の向けやすさという特徴に注目し、認知的側面と、実際の養育行動の側面について検討を行った。

まず、認知的側面として、乳児刺激に触れた際に、そこに乳児の心の存在を仮定しやすいかどうかという特徴を、MM測定により件とした。その結果、母親は全般的に、乳児刺激に対して心の存在を読み込みやすいことが示唆された。しかし、まったく同一の乳児刺激に対して、母親間で心的帰属の頻度に個人差が存在したことから、　乳児の心というものは、既存のものを読み取られるという性質よりも、それを見る者によって存在を「仮定される」という性質があるのではないかと考えられた。幼い乳児が大人と同様に複雑な心的世界を持つと想定しているか否かは、母親によって異なる可能性が示唆された。

では、こうした母親による、乳児に対する心の帰属のしやすさは、実際の乳児との相互作用場面でどのような意味を持つのだろうか。MM 得点の高さ、すなわち乳児に内的状態の存在を想定しやすい母親ほど、実際の乳児との相互作用において乳児の状態と調和したやりとりを行いやすいのではないかと予想されたが、実際には、生後 6 ヵ月時の分析結果から、MM得点と、ＥＡにおける構造化得点にのみ関連が見出された。特に、「敏感性」得点などとの有意な関連は認められず、認知的特徴としてのMMが高いことは、必ずしも実際の乳児とのやりとり場面における全般的な敏感性、すなわち、乳児の状態を敏感に読み取り適切に対応する行動が多い訳ではないことが示された。

さらに、本研究の結果示されたMMとＥＡ「構造化」の関係について、両者は単純な相関関係にあるのではなく、むしろ MM としては中程度の読み取りをした母親が、子どもと一緒にやりとりを作り上げてく行動を最も示すことが見出された。「構造化」とは、乳児の状態を考慮し、適切な手掛かりや足場を与えながら乳児とともにやりとりや遊びを作り上げていく行動の特徴である。MM が高ければ高いほどよい訳ではなく、中程度以上であれば、乳児の状態と調和したやりとりの構築が認められることが示された。こうした、中程度以上のMMの効果について、これまで報告は行われておらず、単純な得点の高さのみを議論する点を見直す必要性を示唆する結果であると考えられる。

また、MMとＥＡの関連について、今回の検討結果からは、生後 6 ヵ月時のみ関連が認められた。12 ヵ月時の観察結果について、全ての対象児がすでに身体移動運動能力を発達させ、自発的に移動、もしくは玩具の操作といった運動を示していた。また、いくつかの言語的表現、特に、単語にはなっていなくとも発声により自身の欲求や好みについて表現する様子が観察された。こうした乳児の側からの意思表示が表出されてくるにつれて、母親が一方的に乳児の心を仮定するという特徴が行動に及ぼす影響は減少するのではないかと考えられる。こうした可能性について、子どもの意思表示や言語能力の発達をとらえながら、母親による行動の変化について検討することが必要であると考える。

(4) 今後の課題

本研究では、主に母親の側に着目し、乳児の心の状態に目を向けやすい傾向について調査を実施した。そこで今後は、MM や EA といった認知および行動の特徴を有する母親の子どもの側の発達に、母親の MM あるいは EA の高中低といった差がどのような影響を持つのかを検討していくことが必要である。これに関して、本課題期間において、研究参加児(12 ヵ月時の調査)を対象に、乳児期における他者の心の理解能力を測定する実験を開始した。特に、生後 1 年目の後半(9～12 ヵ月頃)は、他者の心が何処に注がれているのかという意図性や注意の理解、共同注意の成立を基礎とする社会的参照行動の発現といった、心の理解に関する発達的萌芽と目される現象が見られると考えられている(Frith&Frith,2003;Baron-Cohen,2005)。そこで、乳児と実験者が 1 対 1 で玩具を用いながら遊び、絵本や壁掛けポスターに対する実験者の指差しの理解がみられるのかを実験した。今後、こうした子どもの発達に対して、母親の MM あるいは EA といった特徴がどのような影響を持ちうるのかを検討すべく、データ収集を重ねるとともに、得られたデータの分析を進め、更なる知見を得たいと考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）
篠原郁子．(2010).「乳児との『対話』を築く—大人の洞察が持つ役割—」．第 21 回日本発達心理学会,ラウンドテーブル口頭発表.

６．研究組織
(1)研究代表者
篠原郁子（SHINOHARA　IKUKO）
白梅学園短期大学・保育科・講師
研究者番号：30512446